

越後荒沢岳 北ノ又川大ビラヤス沢

大野

【日時】2006年9月2日～3日

【メンバー】大野、田邊、笹川

9月2日（土）晴

白銀の湯の先まで車で入る。岩魚沢出合石井Pと「また後で」と言って別れる。その先はすぐに箱淵のゴルジュ。先週は中途半端に巻こうとして失敗したので、枝沢から大きく高巻くと明瞭な踏跡があり、簡単に巻けた。美しい岩盤の小滝が続くと河原となる。これまでの遡行、先週より楽な感じがするのは、水量が少ないのか、二度目だからか。

先週下をくぐった滝ハナ沢先の雪渓がどうなっているか不安であったが、残骸もなくなっていた。大した雨も降っていないはずなのに1週間で消え去るとは、驚きである。

芝沢から先は、中を行ってもそれほど時間が掛からないことは先週に実証済み。ゴルジュの中を楽しく突破していく。ちょっとした淵は、左岸の高巻きで突破、と、先週は高巻いた淵を田邊さんが覗き込んでいる。「巻きも簡単ですよ」光線を発するも、田邊さんは「行けるよ」と果敢に泳ぎだしてしまふ。流

心を越えて岸に立

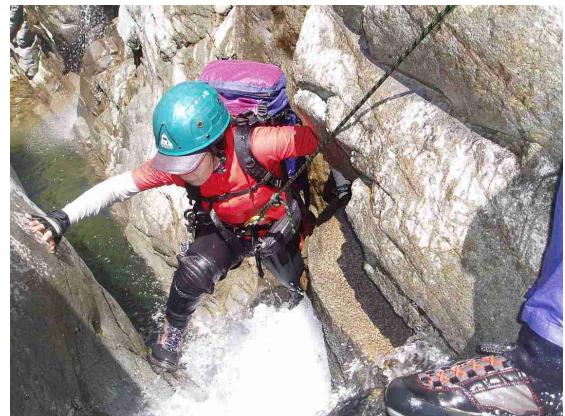
ち上がる所で少し苦労したものの、這い上がってしまう。「あ〜あ〜」。これを見て、笹川さんも果敢に泳ぎ出すが這い上がれず。自分も、続いて挑戦するも、水の冷たさに力が入らず流される。最近、自分の耐寒能力が著しく落ちているのを感じる。結局、二人ともお助けで引っ張り上げてもらう。その先もワンポイントの泳ぎで滝を越えると右岸に先週懸垂下降したスラブとなり、先にはオオビラヤスの切れ込みが見えてきた。予定より大分早い。

オオビラヤス沢出合の滝は、木下さんは水中ショルダーで登ったというが、淵が埋まってしまったのか、腿〜腹に浸かれば取り付ける。残置ハーケンにシュリングをかけて取り付き、問題なく登れてしまった。

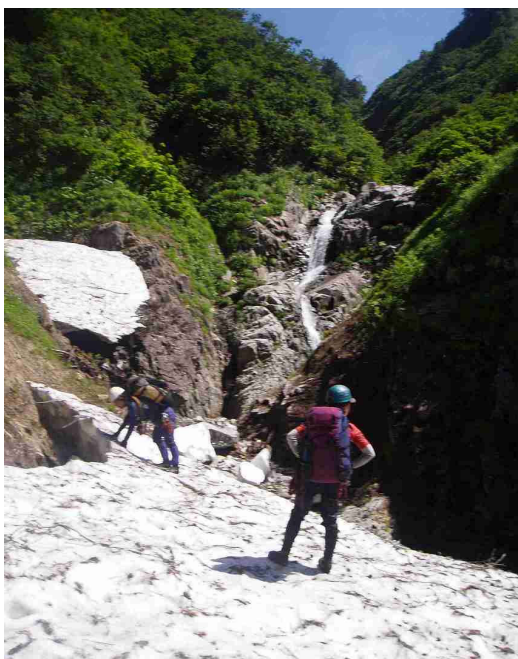
連瀑帯を記録のとおりに登ると、小さなゴルジュは泳ぎと突っ張りで楽しく突破できる。本流と違って楽



←本流を泳ぐ



←小ゴルジュを楽しく突破



童人トマの風 <http://www.tomanokaze.dojin.com/>

↑二段 35M 滝

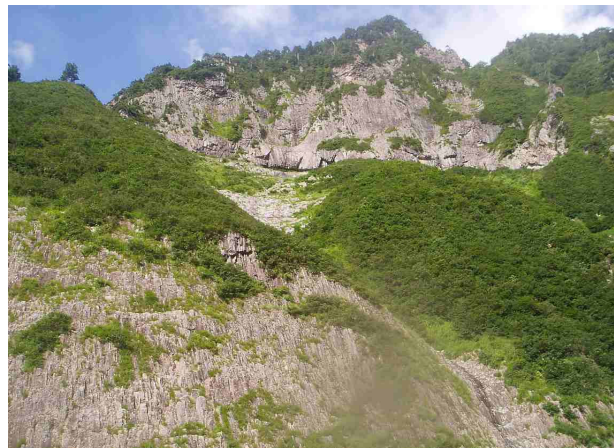
しく泳げる水温に、雪渓は大したことないと考えたが、すぐ先から、予期に反して雪渓が現われる。小滝群の先に現われる雪渓は潜って突破。次の雪渓は上に乗る。右岸の枝沢を合わせ、結構長く、2段 35m の滝手前の滝の落ち口付近まで続く。左岸の草付に移り、岩混じりの側壁を慎重に下る。2段滝は、下段は左、中段で水流を渡って登るが容易。

大ゴルジュの入り口は、崩壊した雪渓が詰まって湯気が立ちこめており、不気味な様相である。意を決して突っ込むと、鉋で割ったようなゴルジュの中で雪渓潜りと崩壊した雪渓歩きを繰り返すことになり、心臓に悪いことこの上ない。最後、崩壊した雪渓に這い上がると、8m の登れない滝となる。左岸の側壁に取り付けば、それほど難しくなく登れそう。ということで自分がロープを付けて取り付いたが、泥と枯木が乗った側壁は見た目以上に悪く、ハーケンを打ちつつ、細い灌木が生えている所まで、苦労して登った。対岸は猿ヶ城に続く大きな壁となっており、絶景である。この上は乾いているが全般的に急で、落ち口方面には進めない。何とか上に上るルートを見出し、落石のある急斜面をトラバースして、地図上大滝の中間地点に出た。ここは快適に登る。



←ゴルジュ入り口

良い時間なので、大滝上で幕とすることも考えたが、石井Pに「また後で」と言った手前、二股までは行くことにする。美しい小滝が続くが、もう悪いところはない。二股ではかなり早く着いていたという石井Pと合流。すでに薪集めも終わっており、ナメ床の岩盤の焚火は盛大であったが、皆疲れていて、8 時前には皆寝床に就いたようである。



←猿ヶ城に至るスラブ

9月3日（日）晴

天気はすっきりしないが、雨は降らなかった。ここまで来れば時間的には全く問題ないので、のんびり火を熾して、ゆっくり出発。この先も、所々にナメがあるものの、荒れた感じは否めない。最後は、ニセ枝沢が複雑に派生してインゼルを構成し、分かりにくくなっている。個人的には、時間もあるので沢を詰めてもよかったが、笹川さんに却下されたので、石井Pと一緒に最低鞍部を目指し、大したヤブ漕ぎもなく稜線へ。稜線では、ちょうど通過中の佐貫Pと対面。1時間程の歩きで荒沢岳の集中となった。

【地形図】 奥只見湖、八海山

【行程】

9/2 車止め(7:10)～大ピラヤス沢出合 (10:30) ～ゴルジュ入り口(13:00)～二股 (16:20) C1

9/3 C1(6:40)～稜線 (8:40)

童人トマの風 <http://www.tomanokaze.dojin.com/>